



Title	徳星金山:北海道産金史研究
Author(s)	浅田, 政広
Citation	経済學研究, 36(4), 39-52
Issue Date	1987-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31757
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(4)_P39-52.pdf



徳 星 金 山

—— 北海道産金史研究* ——

浅 田 政 広

はじめに

徳星金山は上川郡愛別町市街から直線にして北東約13kmの丸山(海拔 824m)付近に位置している。愛別市街から愛別川沿いに北上し、約18.5kmの距離の所に最盛期には1日200トンの鉱石処理をしたという青化製錬所の跡がある。この付近には1,500人以上の人々が住み、鉱山住宅や事務所、小学校、診療所等が立ち並んでいたというが、今はその跡形もない。ただ、往時を偲ばせる製錬所の巨大な段状の石垣だけが、自然の復元力に身を任せ、深い山中に苔むすままに佇んでいる。

ここからさらに約500mさかのぼると通洞坑に達し、そこから丸山山頂にかけて約700mの間に、かつての坑道が散在している。

徳星金山の産金量は、本格的操業に入った昭和9年から17年までの9年間の総計で1,109kgであり、これは道内の金山の中で第12位(下川、国富、大江、豊羽等の随伴鉱山を除く)に位置している。勿論、道内の金山には昭和9年以前から、また戦後も操業していたものがあるので、いわば最盛期といえる昭和12年から15年までの4年間でみれば、徳星金山は724.3kgで道内第8位の産金量であった¹⁾。

* 本稿は「鴻之舞金山」(旭川大学『地域研究所年報』第4号、「千歳金山」(同、第5号)、「手稲鉱山」(同、第6号)、「珊瑚金山」(『旭川大学紀要』第21号)に続くものである。

1) 北海道鉱業会『北海道鉱山累年生産実績』昭和41年版、32～36頁。

このように、金生産において一定の貢献をしているにもかかわらず、他の多くの金山同様、自然科学以外の研究は無く、資料もほとんど残されていない。そうした資料不足を補うために、多くの方々から聞き取りという形で御協力を頂いている。福地唯之氏(昭和6年生、愛別町在住)、笹本吉裕氏(大正10年生、旭川市在住)、井口巳宣氏(大正6年生、愛別町在住)、伊藤政一氏(大正5年生、愛別町在住)、福井敏子氏(昭和3年生、札幌市在住)、山田はつの氏(大正15年生、札幌市在住)、森下成治氏(大正14年生、旭川市在住)、溝口洪氏(昭和3年生、旭川市在住)、都竹一衛氏(明治36年生、旭川市在住)、佐々木信義氏(大正6年生、旭川市在住)、北山久明氏(明治45年生、札幌市在住)、出村敬一氏(大正7年生、苫小牧市在住)、石井照子氏(大正15年生、赤平市在住)、土橋義高氏(大正5年生、札幌市在住)、岡村かつよ氏(大正8年生、札幌市在住)、土橋欣治氏(昭和3年生、札幌市在住)、土橋サツ子氏(昭和6年生、札幌市在住)、加藤正一氏(昭和4年生、札幌市在住)、諏訪禎子氏(大正12年生、札幌市在住)、国分嘉勝氏(大正10年生、札幌市在住)、岩田真一氏(大正14年生、札幌市在住)、藤田敏夫氏(明治33年生、札幌市在住)、小野朝太郎氏(大正7年生、愛別町在住)、小野静子氏(大正8年生、愛別町在住)、鏡国蔵氏(明治44年生、愛別町在住)、遠藤芳勝氏(大正5年生、愛別町在住)、早坂富美男氏(昭和10年生、札幌市在住)等の皆様である。ここに記して深く謝

意を表します。

I 徳星金山の発見と初期の開発

1. 徳星金山の発見

徳星金山が発見されたのは大正12、3年頃と言われている。唯一、愛別町に保管されている『愛別村誌原稿』(昭和15年度)によれば、「一古老の言」として、

「山田三太なる者、愛別川下流(今の市街地々点と思はる)に魚釣の際、川底に金銀鉱石の存するを発見。為め、上流に必ずや鉱脈あらんとの想像をいだき、数度の探検により遂に発見せりと、時は大正十二、三年頃なりき」²⁾とある。

ここにいう「一古老」および「山田三太」についての詳細は不明である。しかし、発見者の姓名について明記している文献はこの『原稿』だけであり、この「山田三太なる者」がおそらく徳星金山の発見者であると思われる。

しかし、徳星金山の全盛期に山元で床屋を営んでいた小野朝太郎氏夫妻によれば、妻静子の父小野与七は秋田鉱専を出た人とよく山を歩き始終「腕かけ」をしており、徳星については試掘権を誰かに横取りされたようなことを言っていたという。徳星金山の真の発見者は、もしかするとこの小野与七かも知れない。しかし、今となってはもはや「藪の中」である。発見に関しても多くの葛藤や曲折があったのであろう³⁾。

その後、当時旭川市に居住していた阿部徳蔵がこの鉱山を所有するところとなったが、その間の経緯を今堀喜三郎は次のように述べている⁴⁾。

2) 愛別村役場『愛別村誌原稿』(昭和15年度)は原稿のままで、公刊されず頁数もふられていない。以後、『村誌原稿』と略記。

3) なお、鴻上寛一『上川開発史』昭和15年には「最初の発見者は旭川市の阿部徳蔵氏」(612頁)とあるが、他の文献等から総合的に判断して、これは単純な誤りと思われる。

4) 今堀喜三郎「焼けを探ねて五十年〔六〕」北海道鉱業振興協会『地下資源』1959年10月号による。

阿部徳蔵は落滑の営林区署員であったが、退職して当時、木材山林等の仲介を業としていた人である。

大正13年末、ブローカー某が阿部のもとへ美事な金鉱石を持参したのがきっかけとなって、阿部は直ちに三鉱区を出願した。これが後の徳星金山となる。しかし、翌14年夏、探鉱してみたが、あまりにも低品位なため、今堀に実査、指導を仰ぐこととなった。今堀は先ず、ブローカー持参という金鉱石を検分したところ、それは紛れもない鴻之舞鉱山元山の上鉱であった。鴻之舞に深く関わってきた今堀にとって、それは一目瞭然のことであったかも知れない。

それにひきかえ、阿部らが現地から持ち帰った沢山のサンプルはいずれも不毛の石英であった。しかし、「鉱質はどこか富鉱部の存在を望まれないでもないと言う顔」をしていたので、念のため現地を見ることにした。

かくして、大正15年5月中旬、今堀等は現地に足を踏み入れ、問題の富鉱部に遭遇する。その時の模様は次のようであった。

「時に15年5月中旬、里では既に蒔付けが始まっているのに、現地は一面の堅雪に覆われ、僅かに川の水面が顔を出し、日向の斜面には稀に地肌をのぞかせて居る処もあった。川の中の露頭と言うのを案内されたが、殆んど不毛石英で同氏の宅にあったのと同種である。フト、南斜面の僅かに笹の出た処を探して見た処が、銀黒の稿も鮮やかな上鉱が転んで居る。三箇所程同じ状態の転石を発見したので、勿々旭川に帰り懇談の上、当方で一切の探鉱費を出す条件で契約を結び、北の王から野外探鉱の熟練鉱夫3名を徳星に入山させた⁵⁾。」

すなわち、この時の実査で優秀な転石が発見されたので、今堀と阿部は探鉱契約を結び、今

5) 同上、15頁。しかし、この「瓢箪から駒」のような話を全面的に信頼する訳にはいかない。「ブローカー某」持参の上鉱が「紛れもない」徳星のものであったかも知れないからである。

堀は北の王金山から探鉱についての熟練鉱夫3名を徳星に派遣したというものである。

そして、この鉱夫達による探鉱の結果、優良鉱脈数本が発見されたのである。

その後、評判をききつけた業者達が頻繁に入り出すようになり、問題も発生している。業者の内の「或る者が共同権者に取り入り、一寸厄介な内約をして仕舞った」ので、その打開に苦慮したが、結局今堀は「契約を解除して退陣した」とある。

鉱山の発見や開発初期にはつきものであるが、徳星金山においてもまた、似たようなトラブルや紆余曲折があったのである。

なお、徳星という名称は徳蔵の徳に由来するものと思われる。

2. 初期の採鉱

こうして阿部徳蔵の所有するところとなった徳星金山は、ただちに起業というわけには至らなかった。未だ道路も通じていなく、起業資金の問題もあったのであろう。

ようやく昭和3年頃になって、鉱夫3、4人で採鉱を開始している⁶⁾。

それは、おそらく原始的な手掘で採掘した鉱石を売却するという経営内容であったと思われる。北山久明氏は、徳星金山が日本鉱業株式会社に買収される直前の頃、阿部徳蔵達と共に数人で露頭の手掘りをして、日立鉱山に売鉱していたという。『村誌原稿』に「鉱石は又陸志までは、微量の鉱石を馬背につけ、以後は馬車にて駅まで出し、日立鉱山に売鉱をなす」⁷⁾という記述があるが、これが当時の状況だったのであろう。

この頃の採鉱および産金量については、統計が残っていないため不明である。しかし、『日本鉱産誌』によれば、昭和5年から9年までの

5年間に、徳星金山で金47kg、銀232kg採れたという数字がある⁸⁾。また、昭和6年から9年までの採鉱量およびその価額は次の表にみる通りである。表によれば、昭和6年は33トン(3,500円)の生産を挙げている。いわゆる狸掘り、売鉱をしていた昭和4、5年頃も、おそらくこの程度の生産規模とみてよいと思われる。昭和7年以降については、次章で触れたい。

表1 徳星金山鉱産額 (昭和6-9年)

	採 鉱 量 (t)	価 額 (円)
昭 和 6	33	3,500
7	797	27,690
8	2,423	127,353
9	2,416	94,614

- (備考) 1. 昭和6～8年は小笠原栄治編、北海道石炭鉱業会『北海道鉱業誌』昭和9年7月、422頁より。
2. 昭和9年は「北海道工業試験場時報」第4年第5号、昭和11年5月、第6表より。

II 戦前の徳星金山

1. 日本鉱業株式会社による買収の経緯

日本鉱業株式会社と阿部との間の組合契約は昭和7年に締結されているが、それが5月か6月かについては定かでない。「5月説」は『日本鉱業株式会社五十年史』(以降『五十年史』と略記)、鴻上『上川開発史』、『6月説』は『北海道鉱業誌』(昭和9年版)、『村誌原稿』等である。

すなわち、『五十年史』によれば、「昭和7年5月、阿部隆氏との間に組合契約を締結(当方持分2分の1)」とあるが、『北海道鉱業誌』では、「旭川の人阿部徳蔵氏多年探鉱に従事し、時に多少の出鉱ありたるも特記すべきものなし。昭和七年六月当社之を継承して漸次事業を拡張し今日に至る」と述べている⁹⁾。

8) 地質調査所『日本鉱産誌』1955年、93頁。

9) 『五十年史』昭和32年11月、654頁。北海道石炭鉱業会『北海道鉱業誌』昭和9年7月、422頁。

なお、鴻上覺一、前掲書612頁には、「昭和7年5月本社が之が探鉱に着手したものである」と、

6) 『村誌原稿』による。

7) 同上。なお、『愛別町史第2巻』昭和60年3月、314頁に日光鉱山とあるのは日立鉱山の誤植。

ここで、日本鉱業(株)が契約を結んだ相手が阿部徳蔵なのか隆なのかという新たな問題も発生している¹⁰⁾。しかし、本人と一緒に仕事をしたことのある北山久明氏の言によれば、徳蔵以外に考えられないのであるが、契約の日付も含めて、正確な所は契約書の出現にでも待つしかないであろう。

いずれにせよ、日本鉱業(株)と阿部双方は昭和7年の5月か6月に探鉱契約を締結し、その後は専ら日本鉱業(株)が組織的かつ大規模に探鉱を促進したものと思われる。先の『北海道鉱業誌』に、「現在は主として探鉱に力を致し、手掘及鑿岩機掘を用ひ後者は比較的硬質の堅入坑道に利用す」¹¹⁾とあるように、当時は主として探鉱に力を注いだのである。その結果、いわゆる阿部時代の昭和6年にはわずか33トンの出鉱量でしかなかったのに、日本鉱業(株)が加わったいわゆる共同時代の昭和8年には、その70倍以上の2,423トンの金銀鉱を産出するようになっている。

採掘された鉱石は0.8トン入鉱車又は一輪車で坑内より選鉱場に搬出された後、精鉱は冬期馬橇、夏期馬車を利用して愛別駅まで運搬され、そこからさらに2ヶ所に送られ製錬されていた。すなわち、上鉱は愛別駅から日立製錬所へ、普通鉱は紋別港を経て佐賀関製錬所へと送られていたのである¹²⁾。

当時の従業員構成は、所長(中村友之助)、鉱長(三浦寛)、係員3名、鉱夫頭1名、坑夫20名、鑿岩夫4名、機械夫2名、鍛冶夫1名、雑夫34名、計67名であった¹³⁾。

昭和7年10月21日付旭川新聞は、「益々有望な狩布鉱山」という見出しで、当時ようやく本格的に採掘され始めた徳星金山に関する記事を

載せている。それによると、採掘された鉱石一吨あたり金70円以上の値があり、そのため目下、多数の工夫が入山して採掘に従業中であると報じている。なお、この見出しからみて、当時まだ徳星という名称は一般化していなかったようである。同年5月か6月の探鉱契約の際には、おそらくすでに名称は確立していたと推量されるが、そのことを証明するものは無い。昭和9年版『北海道鉱業誌』になって初めて「徳星」の名が公式に登場する。

昭和8年当時、道路はまだ整備されていなく、鉱山から愛別市街まで買物等で下山するときは、筐をこいだり川を渡ったり徒歩で約7時間かかったという。昭和15年度『村誌原稿』は、「現在自動車にて一時間弱、徒歩にて四時間程にて下山し得るを思へば真に隔世の感あり」と嘆じている。

日本鉱業(株)による徳星金山の買収は昭和9年におこなわれたようである。しかし、これも探鉱契約と同様、何月になされたかは明確でない。すなわち、鴻上『上川開発史』には、「昭和9年5月鉱業権を譲渡して日本鉱業株式会社所有に帰し、爾後同社が鋭意開発に努めることとなり」¹⁴⁾とあるが、『五十年史』では、「9年7月先方持分を買収し、全権利を獲得した」¹⁵⁾となっていて、5月か7月か不明である。しかし、いずれにしろ昭和9年に買収がおこなわれたことに間違いはない¹⁶⁾。

また、『村誌原稿』には買収に関する記載はなく、「十一年に日本鉱業(株式会社)にて単独業をなし」という記述があるのみだが、これは『上川開発史』にいうところの昭和11年3月の採掘権登録をさしているものと思われる。

昭和9年から11年にかけての日本鉱業(株)に

また『村誌原稿』には、「昭和七年六月日本鉱業株式会社之に加盟し、共同出資にて事業をなす」と記載されている。

10) 北海道鉱業会『北海道の金属鉱業』1952年、68頁に「阿部徳義氏」とあるのは単純な誤りであろう。

11) 前掲、『北海道鉱業誌』423頁。

12) 同上書、424頁。

13) 同上書、422頁、424頁。

14) 鴻上、前掲書、612頁。

15) 『五十年史』654頁。

16) 地質調査所『北海道金属非金属鉱床総覧』1967年、317頁に、「昭和4年」とあるのは誤り。また、『五十年史』の105頁では、朝鮮の大楡洞金山(昭和11年11月買収)と並んで徳星金山が昭和11年に「買収、開発」されたことになっているが、これも単純な誤りと思われる。

よる徳星金山の買収および採掘権登録を経て、これ以降、徳星は金山としての本格的な第一歩を踏み出したと言ってよいであろう。

2. 経営の発展と産金量の推移

日本鉱業(株)の単独経営下に入るに至って、徳星金山は飛躍的な発展をみる。

昭和10年には自動車道路が開通し、鉱石運搬の太い動脈が完成する¹⁷⁾。また同年、鉱業所の電化のため、愛別発電所と鉱業所間に電線架設工事がおこなわれている。

当時の新聞は、「愛別の徳星金山 大飛躍を図る 鉱業所大拡張電化計画」という大見出しで鉱山の活況を伝えている。それによれば、

「最近作業も順調に進み、今後充分採算がとれる見通しがついたので、鉱山経営者においては近く大々的に諸設備を拡張、ゴールドラッシュ時代に敢然乗出すこととなった、同鉱業所は目下愛別発電所、鉱業所間に電力輸送用の電線架設中で、鉱業所の電化能率増進を図ることとなっている」

と報じ、さらに、その頃愛別駅には毎日鉱石を満載した百数十台の馬車が集まり、雑沓を極めている様子が伝えられている¹⁸⁾。

このような金鉱石の搬出に伴って、当然にも駅の収入が増大し、同年4月には、「駅収入に見る村勢」として、昭和8年度と比較しての9年度の伸びが示されている。そのことを紹介している「金鉱と木材で躍進の愛別」¹⁹⁾という新聞記事によれば、貨物、旅客収入の順調な伸びとともに、金鉱の搬出量は8年度の1,358トンから9年度には1,909トンへと551トンの増加をみている。

昭和10年秋、青化製錬所の建設が着工され、翌11年6月に完成、7月から稼動し始めた。こ

れは昭和7年以来の金「価格」の高騰と政府の産金奨励策に負う所が大きいが、この間、全国的に製錬所の新增設ラッシュがあった。北海道については、新設の徳星、増設の鴻之舞、珊瑚をはじめとして、計画中が美笛、国富、大盛、恵庭等の各鉱山であった²⁰⁾。このような状況をとらえて札幌鉱山監督局長関口満三郎は、北海道が金の採鉱時代から製錬時代に入ったことを、昭和11年の年頭に当って指摘している²¹⁾。

昭和11年6月に完成した徳星鉱山青化製錬所は全泥式(一部浮選その尾鉱青化处理)²²⁾でその鉱石処理能力は一日100トン、月3,000トンであり、7月から稼動し始めた。

この年の11月14日に旭川新聞の記者が徳星鉱山小学校開校式の取材を兼ねて、製錬所を見学しているので紹介しておきたい。一行は「村会議員の諸氏や学校長、菊地視学、営林区矢野署長」それに「祝賀会サーヴェスの美形十数人」で愛別市街からバスで鉱山へむかい、開校式前に製錬所を見学した。

「製錬所に要したる費用は実に五十余万円と聞くも一日の原石発掘量100[㊦][㊦]、一箇月の製煉高鉱石において3,000[㊦][㊦]、金20[㊦][㊦]、銀100[㊦][㊦]を産しこれが従事人員男226人、女24人である、右鉱石は最初製錬所より約半里奥の坑道より軌道を以て搬入したる鉱石種々なる機械の中を潜り金銀となって現れるが、その行程などは一寸見た丈では全く記憶出来ない大規模なものである」

と、記者は伝えている²³⁾。

産金ブームの渦中にあった日本産金界の中

20) このほか既に操業中の製錬所は静狩、天龍、轟、北海道、北の王、北陸、大金等であった。『北海タイムス』昭和11年3月5日付。なお、この記事で、総量、北陸はそれぞれ徳星、北陸の誤植と思われる。

21) 『北海タイムス』昭和11年1月1日付。

22) 斉藤平吉「日鉱の青化製錬由来ほか」日本鉱業株式会社『創業五十周年記念社報特別号 回顧録』昭和31年3月、300頁。なお、『村誌原稿』は全泥を全冷、澱物を元物と誤記している。

23) 『旭川新聞』昭和11年11月19日付朝刊。

17) この道路は当時約6000円の工事予算で昭和7年10月20日から着工されていたものである。『旭川新聞』昭和7年10月21日付朝刊。

18) 『旭川新聞』昭和10年2月16日付。

19) 同、昭和10年4月21日付朝刊。

で、日本鉱業(株)も勿論例外ではなく、昭和9年からの数年間に台湾の金瓜石、朝鮮の大楡洞、雲山等の各金山のほか、国内では11ヶ所に青化製錬所を建設している。

そのころ、日本鉱業(株)の青化製錬に関わっていた斎藤平吉氏は、徳星に來た時、「原始林の中で数尺の雪中に馬橋から投げ出された」こともあったという²⁴⁾。

昭和14年3月に製錬設備が拡張され、鉱石処理能力は1日200トン、月6,000トンへと倍増した。

しかし、このように処理鉱量は増大しても必ずしも産金量は増加していない(表2参照)。表からは、採鉱量の増大と産金量の減少との関係が明らかである。すなわち、これは乱掘とも言えるほどの低品位鉱の大量処理への一層の転換を意味していたと見てよいであろう。

表2 徳星金山の産金・採鉱量 (昭和9-17年)

	産金量(g)	採鉱量(t)
昭和9	37,539	
10	73,756	
11	138,689	33,000
12	211,645	42,000
13	209,512	48,000
14	151,451	60,000
15	151,741	70,000(予定)
16	101,066	
17	33,282	
18		
計	1,108,681	

(備考) 1. 産金量は精鉱含有量。北海道鉱業会『北海道鉱山累年生産実績』昭和41年版、31-3頁より。

2. 採鉱量は『愛別村誌原稿』より。

採鉱奨励金の交付や選鉱場、製錬所の新増設に対する助成等、政府による産金奨励の大号令とその命令化とも言うべき産金5ヶ年計画にもとづく鉱石の大量処理ではあったが、徳星金山においては表にみる通りの産金量でしかなかったのである。すなわち、買収年の昭和9年37.5

kgから製錬所完成の11年138.7kg、翌12年が211.6kgでピークを示し、産金5ヶ年計画に入ったにもかかわらず、以降次第に減少傾向をたどり、16年101.1kg、閉山の前年の17年には33.3kgという経過であった。

とはいえ、「はじめに」でも述べたように、昭和12年から15年までの最盛期を含む4年間でみれば、徳星の産金量は道内第8位に位置したのである²⁵⁾。

また、当時本邦第1位の産金会社であった日本鉱業(株)は道内に北隆、大金、恵庭、大盛等の金山を擁していたが、その中で徳星は北隆に次ぐ産金量を誇っていた。ピーク時の昭和12年、徳星は日本鉱業(株)傘下の金山中、産金量で日本国内の7.9%、朝鮮、台湾を含めてもその2.8%を占めており、かなり重要な位置にあったことを物語っている²⁶⁾。

昭和16年夏、金政策の一環として「金属増産強調期間」が実施されている。これは強制的な増産を狙った運動で、翌年の「戦時金属非常増産強調期間」のプレステージに当たるものと思われる。新聞報道によれば、この時、全国監督局長賞を獲得したのは北海道では北隆、隆尾の二金山であったが、徳星金山は札幌鉱山監督局によって、手稲、静狩、鴻之舞、珊瑚、北隆、隆尾、恵庭の各金山とともに道内8優良金山の1つに選定されている²⁷⁾。

3. 従業員数の増加と鉱山街の形成

先ず、徳星金山における従業員数の推移をた

25) 『日本鉱産誌』(93頁)によれば、徳星金山の産金総量は1121kgであり、これは戦前、道内第10位に位置するものであった。

26) 『50年史』109頁。第24表より。なお、この時点ですでに台湾、朝鮮の産金は日本鉱業(株)の中で65%を占めており、昭和15年には約80%にもなっている。植民地産金のもつ重要な意義がうかがえるが、このことについてはいずれ稿を改めて考えてみたい。

27) 『北海タイムス』昭和16年10月24日付朝刊。なお、17年の「戦時金属非常増産強調期間」については前掲拙稿「珊瑚金山」を参照願いたい。

24) 斎藤、前掲書、299頁。

どってみたい。

数人で手掘、売鉱をしていた初期以来、従業員数について最初に明示しているのは昭和9年版『北海道鉱業誌』である。それによれば、いわゆる鉱夫62名およびそれと区別された従業員5名、計69名である。前述したように、その内訳は所長、係員3名のほか、「鉱夫」として鉱夫頭1名、坑夫20名、鑿岩夫4名、機械夫2名、鍛冶夫1名、雑夫34名であった。

昭和9年6月末になると、鉱夫数は79名へとやや増加している²⁸⁾。

青化製錬の開始した昭和11年11月現在では従業員は250名(男226名、女24名)へと急増し²⁹⁾、翌12年には396名へとさらに増加の一途をたどっている³⁰⁾。

ちなみに、当時の休日は月2回(1日と15日)で9時間労働、最盛期には2交代から3交代制へとかわり、坑夫の間では友子制度が残っていた。

このような従業員数の増大に伴い、必然的に1つの町が形成されてゆく。すなわち、山元には鉱員住宅、独身寮(合宿所)等が建設され、鉱山事務所、製錬所等、直接鉱山に関わる建物のほかに小学校、青年学校、診療所、請願巡査駐在所、従業員倶楽部等の施設も整い、いわゆる鉱山街が形成されたのである。

昭和14年度には住宅220戸(男447名、女359名、計806名)を数え、小学校は教員4名、児童147名、青年学校は職員7名、生徒48名、診療所には専属医師1名、嘱託歯科医1名、看護婦(兼助産婦)4名がおり、従業員倶楽部では映画や演芸が月1回以上催されていた³¹⁾。

28) 『北海道工業試験場時報』第4年第5号、昭和11年5月、「金、銀の話」第6表より。

29) 『旭川新聞』昭和11年11月19日付朝刊。

30) 『五十年史』655頁。なお、鴻上『上川開発史』613頁には、昭和14年頃約350名という数字が載っている。

31) 『村誌原稿』より。なお、倶楽部には昭和16年6月11日、大日本産業報国会が派遣した鉱山従業員慰問隊と称する演芸の一団が訪れた模様である。その顔ぶれは、(浪曲) 港家小柳、東家燕壽丸(漫

近くの又陸志部落等から徳星金山に雇傭される者もかなりおり、また呉服等の行商に入山する者等もあって、山はかなりの賑わいを見せていたと思われる³²⁾。

最盛期の昭和15、16年頃には14年度を上回る人口があったと思われるが、残念にも資料は存しない。最盛期の人口は、人によって1,000人以上とも2,000人とも言われている³³⁾。

関係者の話を総合すると、徳星金山には4つの集落があった。それらは上流から沢沿いに、また同時に出来た順でもあるが、採鉱長屋または採鉱、学校長屋または学校、掘鉱長屋または学校下、倶楽部長屋と呼ばれていた。

才) 都川ツバメ、都川柳(歌謡曲) 堀江孝太郎、今井久美子であり、6月6日の大盛鉱山を皮切りに、静狩、千才、鴻之舞、手稻等を巡り、22日の大金鉱山で終る14ヶ所を17日間で回るものであった。『北海タイムス』昭和16年6月6日付朝刊。

32) 『村誌原稿』によれば、約4km離れた所にある又陸志部落(13戸65名)の男子の大部分は徳星金山の雑業に雇傭されて生計を立てていた。行商については、小野夫妻によると、呉服物を主として尾形、笹原、わらや等の人が入っていた。昭和14年から18年10月まで調度係として働いていた岩田真一氏によれば、小間物、玩具等の行商人も来ていて彼等のことを「たべとさん」と呼んだという。

また、この間、坑夫達の傷害事件も幾つか発生している。昭和13年4月11日、三浦専次郎方(三浦飯場であろう) 雑夫藤島実(28才)が三浦の内縁の妻に打撲傷を負わせ岡請願巡査に検挙されたという事件(『旭川新聞』昭和13年4月15日付朝刊)。これに端を発し、同年5月12日、藤島の友人である坑夫和泉正義(26才)と同武山定吉(25才)が三浦方に押しかけ、鉄棒で家具食器等を毀損して暴れている所を請願巡査に逮捕された(同、昭和13年5月28日付夕刊)。また、同年5月21日には、雑夫渡辺直次郎(29才)と同宮崎信一(28才)が仕事のことと言い争い、渡辺がスコップで宮崎を強打、頭部その他に一週間の傷を負わせたという事件もおこっている(同上)。

33) 当時、郵便局員で簡易保険の集金によく徳星金山に行ったという土橋欣治氏によれば、「採鉱」だけで100戸以上、徳星全体で400戸以上はあり、1000人以上の人が住んでいたという。昭和16年4月から12月まで徳星小学校の教諭をしていた笹本吉裕氏によれば、最盛期児童数約180名、人口は1500~1600人以上はいたと述べている。また、当時小学生、現在愛別町会議員である福地唯之氏はおよそ2000人の人口があったと述べている。

それぞれ最盛期に、「採鉱」には採鉱事務所、鉄工場、火薬小屋のほか6戸建住宅（長屋）が10数棟と単身者用の三浦飯場と呼ばれる建物があつた。また、採鉱長屋2棟が改造されて、単身の朝鮮人約50人が入居していた。坑道はこの集落のやや上手に口を開けていた。

「採鉱」と「学校」の学校寄りには鉱山事務所、製錬所、変電所、木工場、配給所、鉱石分析所、診療所等の施設のほかに、請願巡査駐在所、生鮮食料販売店等が設置されていた。山寄りには神社が建てられていた。製錬所と「採鉱」の間にコンプレッサーが設置されており、その付近に6戸建住宅が3棟あつた。

「学校」には昭和11年11月開校の徳星尋常高等小学校を中心に、1戸建の役付従業員住宅数戸、岡部飯場あるいは合宿所と呼ばれた独身寮、床屋、共同浴場のほか10数棟の6戸建住宅があつた³⁴⁾。

その下に続く擂鉢状の地形の所に集落が出来たので、そこは「擂鉢長屋」と呼ばれた。そこには6戸建住宅が10棟あつた。このうち3棟には朝鮮人家族が住んでいた。

一番下に「倶楽部長屋」があつた。300人程度収容可能な従業員倶楽部という施設を中心に共同浴場や10数棟の住宅（ほとんど6戸建だが4戸建も若干含まれていたかも知れない）が立ち並んでいた。ほかに、土木関係に従事していた若狭組の住宅、6戸建2棟があり、ここに朝鮮人も入っていた。また、ここは鉱山街への人口にあたるため門衛所が設置されていた。

こうしてみると、徳星の深い山中に鉱山関連施設を中心に四大集落を内容とする1つの鉱山街が形成されており、その総人口は上記の棟数

から計算して、最盛期には少なくとも1,000人以上、千数百人はいたであろうと推察される。

しかし、このような町も昭和18年の金政策の転換によって完全に消滅せられ、現在では「はじめに」でも記したように、深い山中にただ往時を偲ばせる製錬所の跡だけが苔むすままに佇んでいるのみである。

4. 朝鮮人強制連行と勤労報国隊

徳星金山においても他の鉱山と同様に、戦時中の労働力不足を補い、増産という国策に沿うため、朝鮮からの強制的な労働力移入がはかられている。他に勤労報国隊の導入もあつたようであるが、これについては後述する。

徳星金山への朝鮮人労働力移入は、「朝鮮人労働者募集要綱」（昭和14年9月）にもとづいて、すでに同年10月になされている。

昭和14年10月3日、340名の朝鮮人が小樽島谷汽船の長成丸（2700トン）で函館に上陸した。これが北海道への第1次強制連行である。340名のうち310名が手稲鉱山、30名が轟鉱山へと配属された³⁵⁾。

引き続いて3日後の同年10月6日、いわば「第2陣」512名が島谷汽船大成丸で小樽に入港した。この中の30名が徳星金山に配属されたのである。彼等は3日に朝鮮元山港を発って6日午後4時小樽入港。全員が朝鮮忠清南道の20才から40才までの農民であつた。配属先の鉱山毎に班が結成されていたようで、この時は全部で5班あり、ある班は「全員カーキ色の国防服に身を固めてゐる頼母しき」で、「船酔をした者があつた外全部元気です、御国のためになることでしたら骨身惜まず大いに働いて、ゆくゆく故郷から家族を呼ぶつもりです」と語つたという。「移入」の初期はその全てが独身者が単身者であつたことを物語っている。彼等は後甲板に全員集合して三沢水上署長の訓辭を聞いた後、午後8時小樽発臨時列車で各鉱山へとまわ

34) 岡部飯場の責任者、岡部金次郎は阿部徳蔵の次弟であつた（北山久明氏による）。また、この共同浴場の主人早坂幸佐は佐藤彦吉氏と組んでよく熊打ちに行ったという。打ちとつた熊と生捕りの子熊2頭を前にして、銃を片手に他の10数人と一緒に写っている早坂、佐藤両氏の写真が残っている（諏訪禎子氏蔵）。また、昭和6年5月5日付『旭川新聞』夕刊には早坂幸治、幸佐兄弟の熊狩りの記事が載っている。

35) 『北海タイムス』昭和14年10月4日付。

されていった。すなわち、鴻之舞金山へ302名、大盛金山へ100名、北隆と徳星へそれぞれ30名ずつ、中島系の鉾山（おそらく千歳金山）へ50名が配属されたのである³⁶⁾。

その後も続々と強制的移入が続き、徳星金山へも幾度か引き続いて入山していると思われるが、そのことを示す資料は残されていないようである。その資料不足を、不十分さ不正確さを承知の上で、聞き取り調査で補ってみたい。

藤田敏夫氏は昭和14年7月から17年12月まで、前2年は労務係として、後1年半は庶務係として徳星金山に勤務していた人である。氏は労務係をしていた時、2回ほど朝鮮人の労務募集に携わったことがあるという。1回目は下関まで迎えに行き、約50人ほどを連れ帰った。朝鮮人の班長の名前は金春元といった。2回目は事故や病気で身体を悪くした人数名を連れて、当時日本鉾業の支社があった京城まで行った。途中の村（「面」）で、そこからの出身者達を帰した。その時、村長立会いの下で預っていた給料を本人に手渡した。京城からの帰りに募集した「半島人」を連れ帰った。このような仕事を自分を含めて三人がやっていたという。

金春元という名前を、昭和11年4月以降徳星金山の事務員（調度係、会計係等）として勤務してきた伊藤政一氏も覚えている。金春元は数十人の朝鮮人の責任者としてやってきて、彼等は坑夫として採鉱で働いたという。

当時、徳星に住んでいた他の人々の聞き取りからも大体の模様は察することができる。前節でも多少触れたように、徳星の鉾山街に朝鮮人宿舎が幾つかあったことは明白である。昭和8年から16年4月まで「採鉾」集落の鉄工場で働いていた土橋義高氏によれば、採鉾長屋2棟を改造して約50人の単身の朝鮮人が入居していたという。また、昭和16年4月から鉾山事務所に勤務していた山田はつ氏の昭和17年9月徳星尋常高等小学校を卒業した福井敏子氏の両氏によると、「採鉾長屋」の6戸建住宅3棟に朝鮮

人家族が住んでいたという。1戸平均4人としても70名以上がここに住んでいたことになる。

昭和10年春から17年11月まで徳星金山の下請、若狭事業所において、土木、建築等に携っていた遠藤芳勝氏によれば、若狭組は「倶楽部長屋」に隣接して6戸建住宅2棟に入っており、若狭組約200人のうち約1割20人程度が朝鮮人だったという。当時、徳星小学校生徒であった加藤正一氏は、英語の辞書を所持していて早稲田出身という一朝鮮人を慕って「倶楽部長屋」付近にあった朝鮮人宿舎によく遊びに行ったという。氏によれば、その宿舎に入ると真中に大きなストーブがあり、両側に約20人ずつ向かいに約15人寝れるだけの板の間があり、寝具も敷かれていたという。しかし、この宿舎描写は長屋ではなく、いわゆる飯場である。若狭組の中にあるいはそのほかに、このような飯場も存在していたのかも知れない。

「学校長屋」には朝鮮人は居住していなかったようである。しかし、近くの集落から徳星小学校に通学していた朝鮮人児童が何人かいたことは、当時教員をしていた都竹一衛、森下成治、諏訪禎子各氏の話から明らかである。都竹氏は昭和13年4月から17年3月まで校長として、森下氏は昭和16年4月から17年3月まで準教員として、諏訪氏は昭和16年4月から17年9月まで代用教員として徳星小学校に勤めていた。都竹氏によれば、約150名の児童のうち約20名が朝鮮人児童であった。

このようにみえてくると、最盛期徳星には少なくとも100名以上の朝鮮人がいたと考えられる。日本人従業員との大きなトラブルは無かったようであるが、土橋義高氏は朝鮮人の労働条件について、「仕事は日本人より無理なことは無理だった。小頭が番割り（現場を決めること）をして、同じ坑内でも暑い現場に入るとか、危険な現場へ入れられた。給料も低く、日本人の8割も貰ってなかったろう」と述べている。このような日本人よりも厳しい条件下での不満が爆発したのであろうか、鉄工場の方で乱斗騒ぎが

36) 同、昭和14年10月7日付。

おきたこともある。

8人の朝鮮人が鉄工場へやってきて、たがねの焼き入れの仕方が良くないと親方に文句をつけたのが引き金となって喧嘩が始まった。自分は指に食いつかれたので近くにあった屑鉄で朝鮮人の頭を殴った。幸いに軽傷で済んだが、後で旭川の検事局に呼び出され、徹底的に調べ上げられて参ったと土橋氏は語っている。この事件に関連しているか否か不明だが、北山氏によれば、朝鮮人が来山して間もない頃、何か要求を掲げて仲間を煽動したため本国に強制送還された朝鮮人が一人いたという。

朝鮮人の労務管理に関して、日本鉱業(株)本社が傘下の各鉱山に対して諮問し、それに対して各鉱山が答申した資料が残されている。「(秘)昭和16年度 所長会議資料(三)内地鉱山ニ於ケル半島労務員管理ニ就テ(本社諮問事項第五ノ四)」というのがそれである³⁷⁾。

日立鉱山や高玉鉱山のような日本鉱業を代表するような鉱山のほか、北海道からは大金、北隆、恵庭、豊羽の各鉱山が答申を寄せている。残念にも徳星鉱山のものは無いが、同じ日本鉱業傘下の鉱山の状況を知ることによって、当時の徳星における様子をうかがうことにしたい。

大金鉱山は次のように述べている。

すなわち、労働力確保について国内的には勤労報国隊以外絶望的であり、必然的に「半島人労務者」に頼らざるを得ない。大金鉱山では昭和15年1月以来、4回にわたって「募集」し、昭和16年7月末現在77名を「使役」している。その学歴と日本語理解に関する内訳は次のようであった。

学歴	未就学者	66名	85.71%
	小学校卒業	5	6.5
	小学校中退	6	7.79
日本語理解	全く解しざる者	43名	55.85%
	少々解する者	19	24.67
	精通する者	15	19.48

37) 朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』未来社、1965年所収。

昭和15年9月26日、札幌で開催された「期間満了半島人定着督励懇談会」で林農学博士(「半島人」北大出身)が「半島人ノ指導定着ノ最大ノ鍵ハ愛情、熱意、温和、親切ノ四ツニ尽キル」と述べたが、このような「無智文盲ノ半島労務者」に対してそれをそのまま適用して成果があるか否かは「大イニ疑問ガアル」。結局、彼等を有効適切に「使用」するには、「皇民化運動」を徹底して「真ノ日本精神ヲ吹込ム指導」をして、先ず「日本語の普及」と「家族呼寄せ」が必要である、と結んでいる³⁸⁾。

北隆鉱山は、「半島人ノ大量使用ニ対スル技術上ノ対策」と「管理上ノ対策」の二点について答申している。「技術上ノ対策」としては、原則として「内地人ノ助手」として使用し、「取得金」に対しては「内鮮人ノ区別ナキ事」を認識させ、特に「請負作業」で「取得金ト結付テ督励スルガ効果的ナリ」としている。「管理上ノ対策」としては、(イ)軍隊式統率(ロ)敬神思想と全体主義観念の助長(ハ)貯蓄奨励と衛生観念の啓培(ニ)性問題の処理(ホ)内地人同様の住宅等10点に渡る対策が述べられている。

恵庭鉱山では全体の40%、危険な坑内労働ではその約70%が朝鮮人労働者で占められていた。また、豊羽鉱山(元山)には455名(このほか石山選鉱場に37名)の朝鮮人が働いており、これは全体の約半分に相当し、坑内労働の約7割が朝鮮人であった。

徳星金山には恵庭、豊羽におけるほど高率で朝鮮人はいなかったが、軍隊式に統率され、全体主義的な「日本精神」を吹きこまれながら、比較的危険な作業が多い坑内労働に多く振り向けられていたであろうことは、先の土橋氏の言

38) この「皇民化運動」等についての日立鉱山の答申はさらに徹底したものである。その「指導方針」の1つには、「『皇国臣民ノ誓詞』ノ唱和ニ努メ、半島人従業員ハ常ニ皇国ノ臣民タルヲ自覚シ、事務所々定ノ法内規ヲ遵守スルハ勿論、平素ノ行状ヲ慎ミ、苟モ帝国臣民タルノ体面ヲ汚スガ如キ行為ハ絶対ニナサザルコト」というものがあった(同上書、255頁)。

を待つまでもなく、容易に想像できる。また、「掘鉢長屋」の3棟に朝鮮人家族が入っていたというのも、「家族呼寄せ」、「内地人同様の住宅」等の労務対策の一環であったことも容易に理解できるのである。

次に、もう1つの強制的な労働力確保策であった勤労報国隊についてみてみよう。先の大金鉱山の答申にあったように、勤労報国隊は政府による国内的な労働力確保策としては唯一のものであり、それ以外は絶望的という状況にあった。

徳星金山にも、このような勤労報国隊が来た形跡がある。

藤田敏夫氏は朝鮮人ばかりでなく、勤労報国隊の募集にも携わっており、旭川市をはじめ愛別、当麻、比布等の各市町村役場へ出向き、説明会を開いたことがあるという。その結果、昭和16年頃に約20～30人の勤労報国隊が徳星金山にやって来たようである。唯一の情報でしかないが、徳星にも他の鉱山と同様に勤労報国隊が入ったということの有力な発言であると考えられる³⁹⁾。

5. 坑内外の事故と鉱災害

徳星金山において何人かの事故死者が出ている。そのうち、『殉職産業戦士名簿』には3名が記載されている。昭和12年10月20日、坑内坑夫石沢石太郎、足場折損墜落事故で死亡。昭和13年2月27日、鑿岩夫芳賀秀雄、ダイナマイト爆破事故で死亡。同年7月25日、鑿岩夫加藤栄一、ダイナマイト爆破事故で死亡、というものである⁴⁰⁾。

39) 勤労報国隊については、前掲拙稿「千歳金山」を参照願いたい。

40) 『殉職産業戦士名簿』昭和15年12月、266頁。この昭和11年の事故について、北山久明氏は徳星金山始まって以来の重大事故であったと述べている。そして、死者名については、その名前からして上からも下からも石にはさまれて亡くなった人として、よくその名を記憶していたのである。また、昭和13年2月の事故については、伊藤政一、井口

この7月の事故について、死亡者の妹、福井敏子氏によれば、当時加藤栄一は21才であり、ダイナマイト爆発事故で腸に穴があき、旭川市の唐沢病院で手当を受けたが、結局7月27日に亡くなったということである。

『殉職産業戦士名簿』は昭和15年12月現在のものであり、それ以降のものは記載されていない。したがって、昭和16年1月以降については不明であるが、北山久明、藤田敏夫、鏡国蔵各氏によれば⁴¹⁾、昭和16年頃、製錬所で1名が死亡している。事故にあったのは選鉱所から製錬所までのトロッキ線路＝「輪車廊」での鉱石運搬を請負っていた田川組の若い人で、その人の着ていた半纏が製錬所内にあった機械のベルトに巻き込まれたのに身体も引き込まれて死亡したというものである。

また、北海道開拓殉難者調査委員会の調査によれば、1人の朝鮮人が昭和16年5月、崩落事故で死亡しており、その氏名も判明している⁴²⁾。

負傷事故に関しては、より多く発生していたと思われるが、資料は残っていない。ここでは聞き取りの中から得た若干の件をあげるにとどめざるを得ない。

山田はつの氏の父、弥平は徳星金山においてダイナマイト事故で片目失明した後、閉山にもなる豊羽鉱山への配置転換後6ヶ月目の昭和18年3月26日、落盤事故で死亡している。単独の窒息死でかすり傷もなく、時計も動いていたという。徳星で膝に負傷し、診療所に半年間入院していた石井照子氏の父、鈴木徳蔵はその後赤平の炭鉱、昭和電工豊里鉱業所へ移り、昭和19年12月28日、落盤で死亡している。

已宣両氏の記憶に残っている。芳賀という人が鑿岩機で穴に残っていたダイナマイトを、それと気付かずついでに爆発した。意外と熟練工がこの種の事故に遭うと述べている。

41) 鏡国蔵氏は昭和11年5月から17年10月末まで徳星金山で製錬夫として勤務していた。その後、昭和17年11月から18年4月まで恵庭金山、18年5月からは余市大江鉱山で働いた。

42) 北海道総合文化開発機構北海道開拓殉難者調査委員会主任調査員堅田精司氏による。

ほかに、若狭組で土工をしていた20才の秋に左足首を骨折した遠藤芳勝氏や昭和12年頃クラックに指をはさまれ、三回手術しても直らず曲ったままという鏡国蔵氏の負傷事故等もあげることができる。しかし、これらは恐らく全体の事故数からみれば、氷山の一角をなすものでしかないであろう。

次に、徳星金山における鉱災害についてであるが、社会的に問題となったものは無かったようである。しかし、全く問題が無かったわけではない。すなわち、川の水質汚染は避けられず、製錬所が出来る前までは鱒もあがっていたという川も、製錬所完成後はヘドロのような鉱滓から浸出する排水のため、川に魚はいなくなったという⁴³⁾。

鉱石を細紛し、青化ソーダ、生石灰等を加え金銀の溶解した泥状のものを濾過機にかけて、金銀を亜鉛末とともに沈澱させるといういわゆる全泥青化法という製錬方法の結果出てくる鉱滓には必ず青酸塩が含まれている。そして、それが流出して漁業に被害を与えたという例は、鴻之舞を挙げるまでもなく数多く発生している。月間の処理鉱量がまだ2,000トン程度であった北隆金山でさえ、昭和13年には下流の漁業に被害をおよぼしている。1日200トン、月6,000トン処理の徳星金山の廃液が何ら影響をおよぼしていなかったなどとは到底考えられないのである。

当時、普通には1日180トンの鉱石を処理していた大盛金山の鉱滓滴流水を調査した五十嵐彦仁氏の報告は次のように述べている。

「此の中に含まれる青酸塩(1立中10.64珎である)は95.7~143.5珎となり、毎秒此の程度の青酸加里が流れる事となる。島崎川の河口の水量3,909秒立方メートルに対すれば、0.024~0.036珎となる。此の数字はヤマベに対する嫌

忌極量0.02珎を超えている。

以上は一部の操業中止の状態にあって堆積場に貯溜した滴流水の濃度を基準とするものであるから過少の傾がある。若し水雨による浸漬に遇って、堆積場の廃棄累積泥土から一時に著量の青酸塩が排水するか、或は貯溜水を一時に放流した場合は当然魚族の斃死はまぬがれぬだろう。又島崎川の水量は下流を基準としたが、上流は少量であるから、毒液も当然濃厚であろう」⁴⁴⁾と。

徳星とはほぼ同規模の製錬をしていた当時の大盛金山の鉱毒がこうである。おそらく、徳星の鉱滓滴流水中にも、「ヤマベに対する嫌忌極量」をはるかに超える青酸加里が含まれていたであろう。鱒があがらなくなったというのも、その鉱毒によるものと思われるのである。

最後に、鉱害ではないが、徳星金山で大きな火災が発生している。昭和15年頃の春先の夜、配給所、資料倉庫等が焼け、油の入ったドラム缶が何十本も次から次へと大砲のように爆発し、凄まじいほどに火柱が吹き上がったという。会計課にいた伊藤政一氏は、当時の貨幣で20~30万円の欠損が出たと述べている。火災の原因はカーバイトに雨滴が何か水が作用してガスが発生し、それに火鉢の火が引火したのではないかとされている。

6. 閉 山

昭和7年以来、鳴り物入りで進められてきた政府による金増産、金集中運動も太平洋戦争の勃発とともに一大転換をなし、昭和18年4月を期してわが国の金鉱山は整備を余儀なくされることになった。すなわち、金鉱山の労働力、設備、資材等は銅、鉛、亜鉛、鉄、石炭等の緊急物資増産のために転用されることになったのである。北海道では手稲、沼の上、音羽を除く全鉱山が休閉山に追い込まれた。

44) 五十嵐彦仁『北海道に於ける鉱工業排水と水産被害調査及び研究』楡書房、昭和31年11月、289頁。

43) 岩田真一氏による、福井氏もまた、子供時代、カジカやどじょうなどをとって遊んだのは製錬所前の川ではなく、別の小さな沢だったと述べている。

徳星金山においても、すでに昭和17年から他鉱山への人員の配置転換や設備、資材等の転用ははかられていた。転換先は、鏡氏の例のように、過渡的に恵庭金山等他の金山に振り向けられたこともあったようであるが、そのほとんどは豊羽鉱山（元山と石山選鉱場）であった。そのころ、豊羽鉱山では従業員1,227名（昭和17年1月）、人口3,900人（同年12月）であったが、金山整備による配置転換の結果、北隆、徳星、大盛、恵庭、大金等日本鉱業（株）関係の道内各金山からの人員流入で一躍、従業員2,000人余、人口は5,000人を数えるまでになったという⁴⁵⁾。

このほか、余市大江鉱山への転用もあり⁴⁶⁾、ごく一部が日立鉱山や朝鮮の鉱山へと配置転換されていった。福地唯之氏一家は昭和17年秋、朝鮮の遂安鉱山に転勤、さらに19年8月、熱河省の滦平鉱業所に移って終戦を迎え、父親はウランバートルの捕虜収容所で死亡（享年42才）したという。

また、施設の転用の1つとして、倶楽部の建物が解体されて数km下流の協和小学校の体育館にたてかえられたという⁴⁷⁾。

このようにして徳星金山は閉山を余儀なくされ、その鉱業権、設備一切を帝国鉱業開発株式会社に提供したのである。その際、日本鉱業株式会社に支払われた補償金額は264万円であった⁴⁸⁾。

45) 豊羽鉱山株式会社『豊羽鉱山30年史』昭和56年11月、86頁。

46) 余市大江鉱山は主にマンガン鉱を採掘し、北海道開拓殉難者調査委員会の調査によれば、1944年現在、日本人231人、朝鮮人233人、中国人200人がここで働いていた。ここでは、昭和18年から20年9月までに21人の犠牲者が出ていた。うち8人が朝鮮人（幼児4名）、12人が中国人であった。なお、『草の墓標』1964年3月、315頁では1946年3月1日現在の中国人死亡者は18人となっている。

47) 遠藤芳勝氏による。

48) 『五十年史』120頁。昭和18年度補償金額予算、内地分1億円、朝鮮分1億円のうち、日本鉱業分は内地4832万円、朝鮮3071万円、計7903万円に上った。しかし、日本鉱業は、「補償金を得たとはいえ、長期にわたり粒々辛苦して築き上げた産金資源とその生産機構を失い去ったことは遺憾この上

III 戦後の徳星金山

—— 結びに代えて ——

敗戦に伴って、戦時国策会社としてその役割を果たしてきた帝国鉱業開発株式会社は何らかの対応を迫られることになる。いわゆる経済の民主化の波の中で、昭和20年11月30日、その対応策とも言える改組案が商工大臣宛に提出された。「帝国鉱業開発株式会社機構改革ニ関スル意見要旨」がそれである。その中で、「採算の見地ヨリ稼行継続ヲ可トスル鉱山ノ経営ハ之ヲ鉱発ヨリ分離シ、別個ノ主体ヲシテ之ニ当ラシムルコト」とうたわれている。ここでいう「別個ノ主体」とは「鉱発出資ノ下ニ鉱業ノ受託経営ヲ実質上ノ目的トスル小資本ノ会社」が意図されていた⁴⁹⁾。

しかし、この方針が商工当局に賛同されて実施されてゆく過程では、「小資本」とはいえない日本鉱業（株）が再び金山経営を受託している。昭和21年2月、日鉱の全国所長会議の社長訓辞は、「先般金鉱業ノ整理ニ因リ帝国鉱業開発株式会社へ譲渡シタ金鉱山ノ中、差当り最モ有望ナル大谷、春日、六黒見ノ三鉱山ノ開発稼行ヲ我が担当スルコトニ致シタノデアリマス」⁵⁰⁾と述べている。大谷等三鉱山以外の「差当り最モ有望」とは言えない他の金鉱山はどうなったのであろうか。

帝国鉱発は昭和22年4月、「帝国鉱業開発株式会社整備暫定要綱」を決定し、これにもとづいて整理が促進された。その中で金鉱業に関しては、「将来における金の重要性に鑑み現在稼行不能なる鉱区は之が鉱業権を当社において獲得し主要金鉱会社の共同出資よりなる小資本の

ないところであった。しかも政府の補償方針は投下資本に対してはできるかぎり補償するが、経営収益を基礎とする評価方式はとらないという建前であったので、補償金額はとうてい相償わないものであった」（119頁）と不満を述べている。

49) 『帝国鉱業開発株式会社史』昭和45年、328頁。

50) 『五十年史』128頁。

別会社を設立し之に保有せしむる」⁵¹⁾と述べている。

徳星金山は、ここにいう「現在稼行不能なる鉱区」であるが、帝国鉱発自体は昭和25年4月1日に解散するのであるから、この時までに徳星の鉱業権は他者に譲渡されている筈である。

『愛別町史』は、「休山後、阿部徳蔵は会社より譲り受けた」⁵²⁾と記しているが、この「会社」が帝国鉱発か日本鉱業かあるいは「小資本の別会社」なのか判然としない。同じく『愛別町史』には、「昭和28年林勉が阿部徳蔵より買収」⁵³⁾とあるが、『愛別町史第二巻』および藤原哲夫他「愛別地域の地質と鉱床」では、「日本鉱業株式会社から、林勉がゆずりうけ」⁵⁴⁾とあり、林勉氏が誰から何を(試掘権か採掘権か)譲渡されたのか不明である。あるいは全く放棄されていたのかも知れない。

いずれにしろ、昭和28年頃の探鉱の結果、新たに幾つかの鉱脈が発見されたのが契機となったのであろう⁵⁵⁾。林勉氏は昭和29年に採掘権の出願をしている。この出願は札幌通産局に昭和33年10月6日受理され、35年3月10日にその設定がなされている。採掘権の変遷を見れば、その後、昭和35年12月12日に中外鉱業株式会社が

共同権者となり、36年2月27日、これから林勉氏が脱退して中外鉱業の単独所有となったものの稼行されないまま昭和54年3月16日に放棄され、現在に至っている⁵⁶⁾。

昭和33年10月下旬の5日間と翌34年8月から9月にかけての20日間、計25日間の調査に入っている地下資源調査所の報告は、徳星金山について、「坑道が全く崩壊して、坑内の状況は明らかでないが、徳星鉱山の場合は、たとえ鉱量があったにしても、過去の実績では、ひじょうに、低品位 (Au 2.6g/t, Ag 39g/t) の鉱石なので、現在では、経済的に稼行困難なものと思われる」⁵⁷⁾と、その結論を述べている。戦後、折角採掘権が設定されたものの、結局は稼行されないで放棄されるに至ったことは、すでにこの結論から導き出されていたこととして首肯できる。こうしてみれば、徳星金山における戦前の「繁栄」は政府の狂気じみた金政策にもとづく低品位鉱の乱掘によって支えられていたものであったことが、改めて再認識させられるのである。

(本稿は旭川大学地域研究所道通松木地域研究奨励金および私学研修福祉会国内研修の研究成果である。)

51) 『帝国鉱業開発株式会社史』337頁。

52) 『愛別町史』昭和44年3月、860頁。

53) 同上。

54) 『愛別町史第二巻』314頁および藤原哲夫、国府谷盛明、松井公平「愛別地域の地質と鉱床」『北海道地下資源調査資料』第59号、昭和35年。

55) 『愛別町史』によれば、この時、ボンガ沢等に大小8条余、平均品位10g/tの鉱脈が発見されたという。

56) 出願書類等による。資料は札幌通産局鉱山部所蔵。

57) 藤原他、前掲論文、20頁。